

1. 研究テーマ

すべての子どもたちへの心理的、教育的援助のあり方

2. テーマ設定の理由

学校現場には、いじめ、不登校、暴力行為等、生徒指導上の課題が山積している。教師の体罰により子どもが自殺するという事件も発生し、社会問題化した。

これらの背景に、地域での交わりの希薄化、核家族化や子どもの数の減少等、現代の子どもたちを取り巻く状況に、社会性を育むための基盤そのものが弱くなってきていることが挙げられる。また、インターネット社会の到来により、スマホやLINEを使う生活の中から多くの問題も生じており、それが、いじめ、不登校、暴力、自死等の問題の素地になっているという面も指摘されている。

そんな中、他者との関わりに臆病になったり、苦手意識をもったりしたままに学校生活を送る子どもや、学校が楽しい場所ではなくなってしまう子どもも見られる。

このような現代社会を生きる子どもたち全てを援助しようとする枠組みが、「石隈・田村式援助シートによるチーム援助」（図書文化）に、子どもの求める援助の程度に応じて、3段階に整理されている。

一次的援助・・・「全ての子ども」への援助

日頃の教育活動、開発的・予防的な活動

二次的援助・・・配慮を要する「一部の子ども」への援助

子どもの苦戦が大きくなり、子どもの発達を妨害することを予防することを目指す

三次的援助・・・特別に個別の援助を必要とする「特定の子ども」への援助

一次的・二次的援助も含まれた総合的な援助

本部会では、ここ数年、一次的援助についての理論研究、実践研究を進めてきた。具体的には、エンカウンター、アサーショントレーニング、ソーシャルスキルトレーニングなどを指導に取り入れ、子どもたちの支援をしてきた。

更に、昨年度と今年度は、「Q-U」アンケートによる学級集団分析を取り入れている。教師の側からの日常観察や面談による児童理解には限界や見とり違いも生じることがあるが、「Q-U」アンケートにより、その限界を補い、「学級内の一人一人の状態」、「学級集団の状態像」「学級集団の状態と個々の児童の関わり」を的確に把握し、その結果を生かし、子ども一人ひとりへの支援や声掛けの方法を工夫し、集団や個へのアプローチの方針を立て、一人一人の生き方への関心に応える指導・支援の在り方を考えていく。

以上のような理由から、子どもたちの基本的人権を尊重する態度を基盤に、問題への予防的・開発的な意図をもって、心理的・教育的支援を行いながら、集団づくり、人間関係づくりを進め、子どもたちの自治の力を育てていくための研究を進めることとする。

3. 研究の経過

お互いの実践を発表しあうことを通して、指導や支援の幅広げてきた。また、夏季学習会では、渡辺幸之助校長先生を講師としてお迎えし、「一つ変えれば何かが変わる ～学級づくりの可能性とその方法～」というテーマでお話を伺った。

4. 実践報告

【実践1】小学校低学年の実践

①低学年でしておきたいこと、身につけさせたい力に関わって

○中学校へつながる自治的な力として、

違う考え方や見方を受容する力、素直な気持ち

自己（自分、自分たち）の状況を理解する力

自己（自分、自分たち）の意思を決定する力

目標に向かって合意する力

集団の意思をコントロールする力（好き嫌いの感情に流されない判断）等を想定。

○その力をつけるために、またはその素地を育むために、小学校でしておきたい集団体験として、

自分と他者を意識する経験

ルールを守る経験

仲間とやり遂げる経験、目標を共有する経験

居心地のいい集団をつくり、そこに自分の居場所があるという経験

これらの経験を積み上げることで自己肯定感をもっていること

○小学校、中学校で求められる自治的な力は、その水準は高度になるとしても基本的には同様であ

るとの考えのもと本実践は行われている。子どもたちの自主性や意欲を支えていく学級内の人間

関係をより豊かにするための取組の一つとして報告させていただく。

②本授業の位置づけ

本校の人権教育は、教育課程上、「平和・人権・環境」というタイトルでくくられている。低学年の目標は「人、動物には命があることを学び、生命の大切さを知る。」「地球の環境に関心を持ち、自然を守ろうという意識を育てる。」となっている。

そのために大切なことは、一つには、授業や生活の場面で目標の内容を実感させ、知識的側面を充実させるとともに、意欲や態度を身に付け、実践させることであり、もう一つは、子どもたちの基本的人権を尊重する態度を基盤に、子どもたちの状況把握をきめ細かに行いつつ、子ども同士の関係性を深めるような取組を進めていくことであると考え。誰もが「一人の人間として大切にしたい」という人として当たり前にもっている願いがある。その思いが満たされる時、人権の種は心の中に根をはっていくのではないかな。

学校・学級を、安心して生活できる場に

「自分は受け入れられている、仲間に大切にされている」という意識の涵養



① 「Q-U」アンケートを生かしたアプローチ

② 行事への取組を通して、学級文化活動を積み上げること

③ 構成的グループエンカウンターを導入

④ 振り返りカードによる自己肯定感の育成

第2学年 特別活動（2）学習指導案

平成27年8月28日（水）5校時
2年 男子12名 女子10名 計22名
指導者 岩森 真由美

1 題材 助け合い

2 児童の実態と題材設定の理由

1年生から持ち上がり、担任2年目の学級である。元気に挨拶や返事ができ、素直な子どもが多い。5月に女子が1人転入し、ほぼ同時期に女子が1人転出した。お別れ会や歓迎会をして、転入生もすぐになじんで仲よく生活している。男子は活発で、休み時間はサッカーに夢中である。女子も、一輪車や男子に混ざってサッカーで遊ぶといった活発な子どももいるが、室内にこもりがちな子どもも数名いる。放課後は殆どの子どもが外で体を動かして遊んでいる。

1年時の学級目標は「よくあそび、よくまなび、よくはたらく1年生」であり、2年生になって「協力する」を加えて「よく遊び、よく学び、よく働き、協力する2年生」という学級目標を掲げた。自己肯定感を高め、自立を支援するという観点から、自己決定と自力解決を原則に指導し、取組ごとに頑張りや成長を認め合えるような評価を心がけてきた。自分を認め、友達を認め、互いに認め合うという経験をする中で、協力し合うとはどういうことかというイメージが、一人一人に形成されてきている。

しかしながら、学級の問題、あるいは誰かの抱える課題について、みんなで悩んだり、解決のために知恵を出し合ったりという経験は少なく、個々に目を向けると、耐性や向上心の弱い子どもが見られる。また、友達と関わることに對して臆病になっている様子の子どものも見られる。

つまり、受容的で暖かな学級風土は築かれているが、個々の所属感や連帯感はまだ浅い状態である。
今後、一人一人の社会的な経験と精神的な成長と併せながら、民主的で自立的な学級集団として成長していくことが課題だと考える。

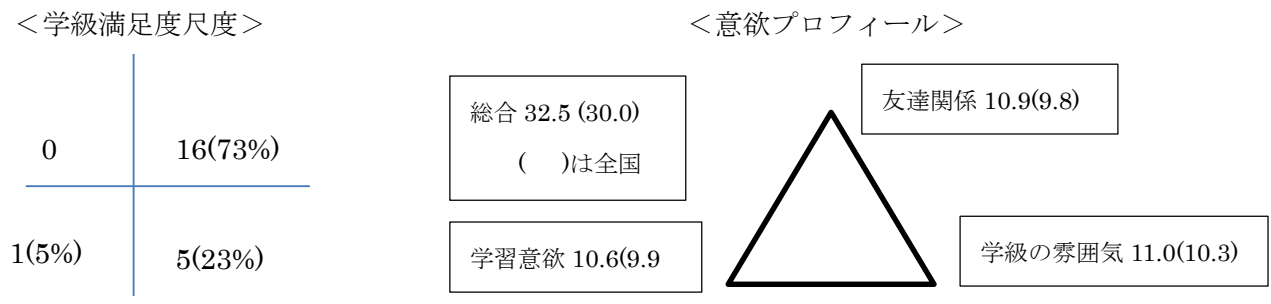
学級の様子<例>

学級の長所・強み	学級の短所・弱点
○学級の取組においては、普段苦手でありやらないことでも頑張ろうという意欲が出る。 ○教え合おうとする雰囲気や助け合おうとする雰囲気がある。 ○担任がいない時でも時間になると席に着く等、時間を守る習慣が身についた。	○精神的に幼い児童がいる。困ると泣く、思い通りにならないと気持ちが切り替えられない 等。 ○学級の課題を自分の問題として受け止められない児童もいる。

<p>○好きな者同士でグループをつくる場面では、仲間外れが出ないように配慮できる。</p> <p>○学習などの目的に応じたグループを作る場合、好きな者同士とか男女とかいったことにこだわらない。</p> <p>○みんなでやり遂げた時に気持ち良さを経験している。給食記念日。お楽しみ会。生活科の町探検 等。</p>	<p>○価値的・態度的側面に対して技能的側面が弱い。</p> <p>○学力や体力の状況が十分ではない児童の意欲が低下する懸念がある。支えていける人間関係づくりが今後必要になっている。</p>
---	---

次に、「Q-U」アンケートから児童の実態を整理する。

「Q-U」アンケートを、1年時に2回、2年時に1回実施し、いずれも「親和的なまとまりのある学級集団」と判定された。2年時の結果集計から抜粋すると以下のようなものである。



<学級満足度尺度からみた学級集団の様子>

学級満足度尺度における本学級の結果を全国的な傾向と比較すると、被侵害得点は全体的に低く、学級のルールや行動規範がほとんどの子どもたちに共有されています。また、承認得点は全体的に高く、ほとんどの子どもたちが先生や友達から認められて、自ら学校生活に充実感をもてるものを獲得しており、その中で自分らしく主体的に生き生きと活動できていると考えられます。

このような状態の子どもたちが集まった学級は、「親和的なまとまりのある学級集団」と判定されます。無理なくしっかりとルールが定着している学級集団の中で、子ども同士の人間関係も親和的に形成されており、友達同士の支えあいや学びあいがとても多く生まれ、学級全体に前向きに活動しようとする気持ちが高まっていると思われます。そういう雰囲気が、子どもたち個々の学習意欲、友達関係を形成する意欲、学級活動への参加意欲をさらに高める要素を持っている学級集団であると考えられます。

また、子どもたち一人ひとりに活躍する場やみんなで協同する場があり、それを教師や友達からプラスに認められる場面が、学級集団での生活や活動の中にたくさんあると思われます。

<結果から考えられる今後の指針>

本学級は、「親和的なまとまりのある学級集団」と判定されますので、先生が現在行われている学級経営方針は、このまま継続されることが望ましいと判断されます。学級内のルールや行動規範も十分定着していると考えられますし、子ども同士の人間関係も良好だと考えられますから、子どもたちの主体性のある行動を誉めながら見守るような対応がこの学級の子どもたちには効果的だと思います。今後、学級経営上で配慮すべき点があるとしたら、学級全体が一つの方向にまとまっているときに、それにのれ

ない一部の子どもがいる場合がありますので、その個別対応に留意が必要です。

また、学校生活意欲総合店点の学級平均も高くなっています。理想的な学級経営が展開されていることが想定されます。子どもたちは、情緒が安定した中で、意欲的に活動できていると思います。このような段階では、できる範囲でいろんな活動を子どもたちの意見を取り入れて計画・活動させ、振り返りは教師が子どもたち個々の良い行動を誉めるようなスタイルが、子どもたちの学校生活意欲の高さを維持することにつながると思います。そして節目のポイントで、全体に対してよかった点、改善点を示し、子どもたちに話し合いや認め合いを展開させるのです。子どもたちの交流も、より広がると思いますので、それにふさわしいグループ環境、場面設定に配慮してあげるとよいでしょう。

<ソーシャルスキル結果のまとめ>

学級の子どもたち全体のソーシャルスキルの定着度をみると、基本的な他者との関係形成に必要な態度や応答、集団生活・活動への参加に必要な話し合いの態度、さらに、積極的な対人行動・集団参加に必要な能動的な援助のスキルなど、多くのスキルが身につけている状態と考えられます。本学級は、「親和的なまとまりのある学級集団」であり、学級生活で必要とされる基本的なソーシャルスキルを多くの子どもたちが満たしていることで、学級活動が建設的に展開され、親和的で活気のある状態が継続されていると考えられます。理想の状態と言えます。

今後も、子どもたちのよい点を具体的に示して承認していく姿勢で、この状態を維持されるとよいでしょう。子どもたちがより自主的に活動できるように、先生は、活動の大枠を全体で確認したら、細かい指示は少し控えるようにして、子どもたち独自の活動を少し見守るようにしていきます。きちんとできたことは、全体の前でしっかりほめてあげ、マイナス面は次にどうすればよいのかを、グループで話し合わせるように展開していくのです。そのとき、ソーシャルスキルの各項目の内容を、意識させながら話し合わせるとよいでしょう。

担任の学級分析及び「Q-U」アンケートの結果分析を鑑みて、本学級では、次の点に留意することが、学級や個の成長につながると考えられる。

- 子どもたちの主体性のある行動を誉めながら見守るような対応。
- のれない子どもへの個別対応。
- いろんな活動を子どもたちの意見を取り入れて計画・活動させ、振り返りでは教師が子どもたち個々の良い行動を誉めるようにすること。
- 活動の大枠を全体で確認したら、細かい指示は控え、子どもたち独自の活動を見守ること。
- マイナス面は次にどうすればよいのかを、グループで話し合わせること。

さて、2学期が始まったばかりである。

集団としての力をつけていくために、2学期から、5、6人ずつの4班を編成することにした。これまで4人ずつ6班だったので、班として何となくまとまることができていたが、6人となると様々な軋轢や不調和も生じてくることと思われる。それらと向き合い、解決することで、子どもたちの主体性や自立心が育まれると考える。班長や副班長には、これまで以上にリーダーの役割を求められるであろう

し、他のメンバーたちにもフォロワーシップが求められることとなる。本単元では、このような、課題の生まれることを前提とした新しい班を単位に構成的グループエンカウンターに取り組み、助け合いを体験させたい。

子どもたちの学校生活は、相互理解と信頼のもとに成り立っている。豊かな人間関係が築かれることで子どもたちはのびのびと自己実現しながら成長していくことができる。その人間関係を支えるのは「思いやりの心」であろうが、「心」は目に見えないので、気付かせたり、感じさせたりする経験が大切である。失敗体験が少ないという学級の実態や主体的に環境に働きかけていく個の力をつけたいという課題に即した構成的グループエンカウンターを体験させ、認め合い高め合う学級集団の育成へとつなげたい。

本時は、導入で、まず楽しく力を合わせることをねらったゲーム的な活動「何だ何だ班会議」を行う。次に、自己理解、他者理解を促すエクササイズ「ブレインストーミング」と信頼体験のできるエクササイズ「団結くずし」を実施する。ゲームを進める中で楽しい雰囲気をつくり、力を合わせて達成する喜びを体験させる。自分の役割を果たすことで自尊感情を高め、友だちのよさに気づき感謝する、そんな体験を通して、友だちと助け合う関係をもつことの大切さを理解させていきたい。

3 学級活動（2）の評価規準（※試案）と本題材が目指す児童の姿

観点	集団活動や生活への 関心・意欲・態度	集団の一員としての 思考・判断・実践	集団活動や生活についての 知識・理解
評価規準	①友達と一緒に活動を楽しみながら、助け合っている。 ②進んで活動に取り組み、自分のよさを発揮している。 ③課題解決に向けて取り組んでいる。 ④自分のよさや友だちのよさを進んで見つけようとしている。	①ルールを守って活動できる。 ②自分の考えをもち、相手の考えも受け入れている。 ③どのようにすればいいかを考え、判断、実践している。 ④仲よく助け合って、自分の役割を果たしている。	①みんなで助け合って学級生活を楽しくする大切さを理解している。 ②相手を思いやった行動が、よりよい生活につながることを理解している。 ③自分や友だちのよさが分かり、助け合う大切さを理解している。
児童の姿	さまざまな活動を通して、集団の一員としての自己の役割と他者への理解を深め、友だちと助け合うことの大切さに気づく。		

4 本時の展開

(1) 本時のねらい

力を合わせてゲームを進め、自分や友だちのよさに気づき、助け合うことの大切さに気づく。

(2) 準備

体育着に着替えておく チョーク4色 タイマー
動物の写真(猫 クマノミ ライオン キリン 大わし) マット小2枚

(3) 本時の展開

段階	学習活動	授業者の支援と 指導上の留意点	目指す児童の姿と 評価方法	環境や教材の 工夫
インストラクション 5分	○新しい班でいろいろなゲームを することを 知る。 ○「何だ何だ班会議」 をする。	・自分や友だちのいいところをたくさん 見つけて、仲良しの班になっていく ことを伝える。 ・リラックスさせるようにする。 ・大きな声を合わせたり、みんなで 相談したりする姿を評価する。	・楽しく活動したいという意欲をもつ。 <観察> ・ルールを守って楽しく活動する。 <観察>	チョーク。
エクササイズ 30分	○ブレインストーミング「1日だけ なれるとしたらどの動物になりたいか」 を伝え合う。 ○「団結くずし」 をする。	・「いい悪い」の判断や「つまらない 面白い」の評価をしない。 ・友だちの発表をよく聞くことを指示 する。 ・班長に進行係をするように指示する。 ・危険な行為や人を傷つける悪ふざけは 事前に注意する。(乱暴や蹴り合っ てはいけないこと等) ・チームワークが必要なことを伝える。 (組み方、引き方のコツ、力の弱い 人を守ること等)	・発言している。 ・よく聞いている。(頷く、相槌をう つ) ・友だちの気持ちを認めている。(拍 手する) <観察> ・助け合っている。 ・ルールを守っている。(暴力的になら ない)	動物の写真 マット タイマー
シェアリング 10分	○感想や気付きを 伝え合う。 ○振り返りカード を書く。 ○書いたことを発 表する。 ○教師の話を聞 く。	・班で感想を出し合う。 ・全体で共有する。 ・新しい班で、一人一人がさらに成 長していきたいことを話す。	・友だちのよさに気づいている。 <発言> ・友だちと力を合わせることの楽し さを理解している。 <観察 振り返りカード>	振り返り カード

(3) 評価

力を合わせてゲームを進め、自分や友だちのよさに気づき、助け合うことの大切さに気づけたか。

(4) 事後指導

○友だちを尊重し大切にしようとする気持ちを持続できるように、良い言動を随時ほめると共に、帰りの会で良いところの発表を続けていく。

○助け合おうとする気持ちを、運動会や生活科の秋祭りの取組につないでいく。

5. 授業後の研究会より

- ・子どもたちが生き生きしていた。
- ・ワクワクして安心して動いていた。
- ・子どもたちが満足していた。それが成長につながっていく。(指)
- ・本時の目当ては達成できていた。(指)
- ・学級経営がしっかりしている。(指)
- ・学級目標が昨年度の成果の上に立ってたてられているところがよい。(指)
- ・4人班から6人班に編成を変えたのは効果的だった。
- ・聞く態度が身についている。
- ・6人いると集団が作れる。いろいろな人間関係を経験できる。(授)
- ・子どもたちの目標は、「仲良くなれる班」、希望を取り入れて6人編成になった。必要な時にはさらに半分に分ける。サブリーダー指導をする。(授)
- ・「相手を尊重する気持ち」を「聞く」の土台にして繰り返し指導している。聞いてもらって気持ちがいいという体験が、「聞く心」を育てていく。(授)

6. 事後指導の中から

<運動会の2年生の様子>

「時間を守ろう」という児童会目標について、2年生は運動会の「集合時刻を守る」ことをめあてにした。全校練習では、いつも一番最初に集まり、静かに待つことができた。体育主任から、「いつも早く来ると大変じゃないのか」と質問され、「練習は大変だけど、がんばってやりきると気持ちがいい。」と答えたそうである。また、1, 2年生の練習の時は、上級学年らしく1年生に声を掛けたり、整列させることを、自ら気づき行動にうつしていた。強いリーダーシップはないけれども、やさしいお兄さんお姉さんとして、低学年を明るい雰囲気でもとめてくれていたと感じる。

全校で、また学級で、具体的な目標を共有して、精一杯力を出しきれた運動会だった。見通しをもって自ら行動する力が低学年生なり

についている。学年が上がるにつれて、全体を見る力を伸ばしていけたらいいと思う。

<保護者の連絡帳から>

- リレーで2回走り頑張る姿，台風の目で他学年の人達と力を合わせて頑張る姿に成長を感じました。
- まだまだ小さくて，幼い幼いと思っていましたが，1年生と一緒にいると「あー，やっぱり2年生，成長しているな。」と感じる運動会だったように思います。
- 「OLA!」では，思わず涙が出ました。とても良かったですね。持ち帰った麦わら帽子を見たところ，飾りを先生が縫い付けてくださったとのことで，ありがとうございました。競技や行進をする姿に成長を感じた1日でした。

【実践2】中学校の実践

塩山中学校では，平成21年度から生徒主体の「学びの集会」をおこなっている。

- 第一回（平成21年度）・・・学びたくても学べない状況から考える。
- 第二回（平成22年度）・・・わだつみ平和文庫から考える。
- 第三回（平成24年度）・・・立命館大学国際平和ミュージアムでの平和集会から考える。
- 第四回（平成25年度）・・・マララさんの生き方から考える。
- 第五回（平成26年度）・・・釜石の奇跡から考える。

今年度は「わだつみ平和文庫」を残した中村徳郎さんの思いを考えることを題材として3年生が中心となって，「学びの集会」をおこなった。形としては，3年生2人～3人1，2年生が班になり，「学ぶこと」について考える集会である。3年生は全員がやるべき役割がある。必ず自分の考えを言ったり，その場にあう適切な言葉や態度を取らなければならないので，それぞれのコミュニケーションを試される機会でもある。人前で話すことが苦手な生徒であっても，自分のやるべき役割がある。また，子どもたち同士の関わりの中から，一人ひとりが自分の良さ，他の人の良さに気づく機会にもなっている。

○学びの集会に向けて3年生の取り組み

- 6月12日（金）5，6校時
- 5校時 体育館で 全体で，学びの集会の流れを説明（古屋）
クラスで 平和ミュージアムで見たことを分担する。（何を伝えるか）
- 6校時 自分の原稿作りとチェックを受けて言葉などを直す。
- 6月17日（水）5校時学活で，班ごとに発表をしあう。
- 6月18日（木）当日

○学びの集会の流れ

学びの集会の経過報告（生徒会より）

- これまでの学びの集会でどんなことをしてきたか
- わだつみ平和文庫へ行った 「きけわだつみのこえ」のDVDを見た

「わだつみ」とは 「わだつみ平和文庫」に込められた思いとは（生徒会より）

なげけるか いかれるかはた もだせるか きけはてしなき わだつみのこえ

「わだつみ」の意味を考える

「立命館大学国際平和ミュージアムへ行って感じたこと」をグループで伝える（3年生が中心となつた班）

展示してあるもののうち特に印象に残っているもの

展示物の紹介を通して不自由なく学べることへのありがたさに気付かせたい

克郎さん・徳郎さんが求めていた「学び」とはどんなものか（個人→グループ）

学びたいことを学べる環境 学びたいから学ぶ 自分から自分のために学ぶ

今の私たちがしている「学び」の現状はどんなものか（個人→グループ）

SUN（家庭学習）をこつこつ取り組んでいる 提出物を出すよう心掛けている

やらされている あまり熱心ではない

今の私たちの「学び」との違いは何か（個人→グループ）

自ら学ぼうとする気持ちがたりない 学ぶ目的がはっきりしない

物に恵まれている 学びたいときにいつでも学べる・調べられる環境

今日の話し合いで気づいたことは何か（個人→グループ→全体）

これからあなたはどうか「学ぶ」か（個人→グループ）

↓

掲示物にする。

職員室の前の廊下にグループごとに掲示する。

○学びの集会を終えて

3年生にとっては、2人から3人で40分間、あまり話したことの無い1,2年生とも過ごすことや意見や考えを引き出すことは、大変な時間であったと考える。しかし、その流れを頭に入れながら、力を合わせてリーダーとして過ごすことで自信につながったと考える。自分にはできないと思ったことも、やりきることで自分自身の自己肯定感に繋がったと思う。

5. 成果と課題

少人数の部会ではあるが、全員が実践してきたこと、実践したいこと、実践すべきことを出し合い、情報交換をすることを通して、自分の実践につなげてきた。お互い聞きあうことで、今まで気がつかなかった新しい見方ややり方を知ることができている。

また、小学校と中学校と交流があることで、それぞれの違いやそれぞれの立場を理解しあうことができた。子どもたちの成長の過程を見て、9年間を見通した指導に生かしている。

研究同人

渡邊 尚英 (祝小学校 指導助言者)

深海小緒里 (勝沼小学校)

竹川きよみ (岩手小学校)

渡邊由美子 (松里小学校)

加々美教子 (三富小学校)

堀内 友貴 (三富小学校)

岩森真由美 (井尻小学校)

雨宮 由香 (井尻小学校)

堀内 美紀 (塩山南小学校)

加藤 紀子 (山梨南中学校)

佐久間 潤 (塩山中学校)

根岸喜久恵 (塩山中学校)